

填詞選釋

目加田， 誠

<https://doi.org/10.15017/2557068>

出版情報：文學研究. 13, pp.1-32, 1935-10-20. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



文學研究

第十三輯

(昭和十年十月發行)

填詞選釋

目加田 誠

溫庭筠 更漏子

柳絲長、春雨細。花外漏聲迢遞。驚塞雁、起城烏。畫屏金鷓鴣。
簾垂。夢長君不知。

香霧薄。透簾幕。惆悵謝家池閣。紅燭背、綉

全

王鏊香、紅蠟淚。偏照畫堂秋思。眉翠薄、鬢雲殘。夜長衾枕寒。
聲々。空階滴到明。

梧桐樹。三更雨。不道離情正苦。一葉々、一

詞(詩餘、填詞)は唐に起り、五代に盛に、宋に至つて隆盛を極めた。李白が憶秦娥、菩薩蠻等の詞を作つて詞の體

を創めたと云ふのは恐らく後人の附會であらうから、詞は矢張り中晚唐に起つたものと見て差支へ有るまい。その晩唐の詞人中特に秀でたのが此の温庭筠である。

温庭筠と云へば詩の方でも、綺艶綉麗の詩風を稱された人で、美しい詩を讀んで其の人を想ふが、實は温鍾馗と渾名されて、其貌甚だ陋、才名に稱はず、とある。太原の人、舊名は岐、字は飛卿、宰相彦博の孫である。琴や笛に堪能で、詩は李商隱と名を齊うし、温季と並び稱された。温八又の異名は、その詩を作るに非常に速かつた事を語る。然し才情に任せて、放蕩不羈の行多く、狹斜の巷で、巡捕と争つて齒を折られたことが舊唐書の本傳にまで見えてゐるがそんな事は珍らしくも無かつたらう。遂に彼が都を逐はれるに至つた原因を、當時宣宗が菩薩蠻の曲を好んだので、丞相令狐綯が温の做つた詞を假りて進めたことを人に語つた爲とも云ひ、又綯が或時莊子に見える文句を知らなかつたのを、彼が嘲つた爲めとも云ひ、或は又宣宗が微行して、とある宿屋で温に遇つた折、温に侮られたことを怒つて、遂に方城の尉に謫したとも傳へられるが、どの途當路者には容れられぬ性格だつたのだらう。竟に流落して死んだ。其の著書は新書藝文志には握蘭集三卷、金筌集十卷、詩集五卷、漢南眞藥十卷を擧げる。花間集には其詞六十六首、尊前集には五首が載せられてゐる。時代も廢頽的な晚唐の頃、その性格も亦こう云ふ禮教に拘はらぬ風流才子で、且つ當時の詞は何れも酒間妓女に歌はせたものであることを考へると、其の詞に穠麗な艷體のものが多いのは自然である。

此の更漏子の調は温庭筠によつて創られたものとされ、雙調、前段は六句、兩仄韻、兩平韻。後段は六句、三仄韻、兩平韻から成つてゐる。つまり、

柳絲長句 春雨細仄 花外漏聲迢遞韻 驚塞雁句 起城鳥平 畫屏金鷓鴣韻 香霧薄換仄 透簾幕韻 惆悵謝家
池閣韻 紅燭背句 綉簾垂換平 夢長君不知韻

(換頭の句(薄)に韻が用ひてあるが、或は之に韻を用ひないで後段も六句兩仄韻兩平韻になつてゐる更漏子の體もある。)此の詞は初め三字で一句、又三字で韻になる。柳絲長、と切り、春雨細と續く處に非常にしつとりとした氣分を出して居るので、柳の絲の雨に濡るゝ春の夜である。雨は絲の如く霧の如く、細く音もなく降つてゐる。漏刻の音に夜は靜かに更けて行く。謝家の池閣は詞家の好んで用ふる文句で、池に臨んだ紅樓を想へばいゝ。雨は庭の花にも、暗い池の面にも音もなく降りそゞいであるやう。香の煙はゆるく漂ひ、牀には刺繡の帳が垂れてゐる。帳の蔭は暗く、臥す人の姿は見えず、たゞ屏風の金の鷓鴣が灯に映えてゐる。紅燭背、綉簾垂で、帳の蔭暗く、人の姿を寫さず、たゞ夢長君不知で、ひそやかな寢息を聞く思をさせる。驚塞雁、起城鳥は此の靜寂な夜を破るものである。その故に又あとの畫屏の金鷓鴣のじつと動かぬ、華やかな寂しさが一層印象的になつて來るのである。

王國維が溫飛卿の詞風は畫屏の金鷓鴣の一句を以て現はすことが出來ると云つた。此の詞は彼の作の代表的なもので、かうなると最早五七言の詩の境地でなく、只詞に於てのみ表現し得るものではあるまいか。詩と詞の境地の相違は溫飛卿の詩集を讀み、そして其の詞を見ると、何れも美しい文字に充たされてゐる乍ら、自づと領域を異にしてゐる事が解るのである。

次の一首も同じく更漏子である。前段は部屋の内を寫し、後段は窓外の雨の音を聞く。玉鑪にくゆる香も、更けて蠟の流れる紅燭も、前の春の夜と同じである。けれども之は衾枕寒い秋の夜であり、だから眉翠薄くと云ひ、鬢雲殘

すと云ひ、書堂といふ文字すら白ら／＼とうすら寒い空虚な響を持つ。前段秋思は夜長を起し、夜長は後段の幾句を起す。後段は長夜の枕にきく窓外の雨の音である。それは柳の糸に煙る春の雨でなく、一葉々、一聲々、何時迄も降り止まぬ梧桐の雨の凄凉さである。空階に滴つて明に到るを聞くは遂に明に到る迄、ねもやらす離情に苦しむ人である。之を讀めば直ちに元曲の、白仁甫の梧桐雨が想ひ出されるだらう。楊妃を失つた唐の明皇が秋夜梧桐に降る雨を嘆ずる段。更殘漏斷枕冷衾寒のあたりから、共隔着一樹梧桐直滴到曉で終るあの曲である。

韋莊 謁金門

空相憶。何計得傳消息。天上姮娥人不識。寄書何處覓。新睡覺來無力。不忍把伊書跡。滿院落花春寂々。斷腸芳草碧。

唐に起つた詞は五代になつて來ると幾多の名手が輩出した。趙崇祚の花間集には主として蜀の文人の詞が多く輯められてゐるが、それは趙崇祚が蜀の人であつた關係もあり、又事實爭亂の中原を離れた蜀の國に當時文學が榮えた事も尤もであるが、まだ／＼此の他の地方にも多くの詞人が有つたらうと思はれる。蜀は一體文人の出る處で、この國の妓女も唐の薛濤以來詩文に巧みな者が多かつたと云はれる。この花間集は詞の總集として最も早いもので非常に貴い資料でもあり、又その中に收められた詞は本當に愛すべき小令が多い。韋莊は此の中に見えてゐる五代の詞人中の第一人者である。韋莊字端已、京兆杜陵つまり長安の郊外の人で、唐の文宗の世に生れ、溫飛卿より廿歲程遅れてゐる。初め故郷の長安に居り、後魏州に移り、四十を越えて又長安に戻つて試験に應じやうとした。其時黃巢の亂が起

つて、都が陥り、彼は兵中に陥つて弟妹を見失ひ、漸く白刃の間にめぐり合ふ等といふ出来事もあり、おまけに大患を得て、言語に絶した苦勞をした。其後一と先づ洛陽に移り、この間に作つたのが有名な秦婦吟である。其後も彼の境遇は變轉多く、江南を轉々として、五十を過ぎて蜀に入り、又江西に歸り、遂に再び都に戻つて試に應じ、進士に及第して、中書舍人となつたが、程なく聘に應じて蜀に入つた。此時六十六歳。此より終身蜀に仕へて、再び故郷に返る事は出来なかつた。其間に戦亂が続いて唐朝は亡んで了つた。七十五歳を以て卒。彼は蜀に在つて、昔杜甫の住んだ浣花溪の邊りに寓居した。だからその弟の蘊が輯めた彼の詞集は浣花集と名付けられる。又花間集の外、全唐詩、尊前集、草堂詩餘等にも各々章莊の詞は載せられてゐる。常に故國を慕ひ、而も今は兵亂の巷と化した故郷に歸る事の出来ない悲しきは菩薩蠻の詞五首に歌はれてゐる。或は

琵琶金翠羽、絃上黃鸝語、勸我早歸家、綠窗人似花。

と云ひ、或は

未老莫還鄉、還鄉須斷腸。

と云ひ、又或は

洛陽城裏春光好、洛陽才子他鄉老

と嘆いた。その晩年の孤獨をまぎらすものは唯酒色と、そしてひたすら詞に嘆きを唱ふ事であつた。幼く親に別れ、一生艱難の中に暮した彼は、ひどく吝鄙であつたと云ふ噂さを後世に迄残してゐる。其の頃蜀に在つて寵姫を得たが、それが又文筆に秀でた麗人であつた。之が晩年の彼に取つて、どの様にか心の慰さめであつたらう。然るに蜀の

主、王建の爲めに之を強奪されて了つたので韋莊は悵快の極み、一首の詞を作つた、それが此の調金門の詞だと云ひ傳へられてゐる。

調金門は雙調、前後段各四句、四仄韻を用ひる。

空相憶韻 無レ計得傳三消息一韻 天上姮娥人不レ識韻 寄レ書何處覓韻 新睡覺來無レ力韻 不レ忍レ把三伊書

跡一韻 滿院落花寂々韻 斷腸芳草碧韻

上述の傳説を直ちに信ずる事も出来まいが、其の心で此の詞を讀むと、全篇全く飾り氣のない率直な叙情である。起句空相憶の咏嘆から始まつて、今は消息する術もない、只空しく相憶ふばかり。侯門深きこと海の如く、一度連れ去られたものは、天上に住む姮娥の如く、最早人の手のとどかぬものになつて了つた。未練は相憶ふと云ふ云ひ方にある。便りして見度くとも、その人は何處にかくまはれて居るか、それすら知る事が出来ない。第二句、第四句は同様な意を繰返して、あきらめ切れぬ思を現はす。後段は、一身憔悴、新に眠から覺めて、愈々覺ゆる空虚、何をする氣力も無く、今に尙捨てかねてゐる女の残した文藪を、手に把つて看るに忍びぬ心持ち、春は寂しく暮れて、碧に萌える草葉の色が目には泌みる。この詞、末二句を除いては全く叙情のみで、希望を失つた晩年の作者の思が、眞實に訴へられて、其の爲め末二句の叙景、春寂々も、草の碧も本當に泌々とした質感として受け取れるのである。傳説は更に、この詞を傳へきいた女が、食を絶つて遂に死んだ事を附け加へてゐる。

馮延巳 鵲踏枝(蝶戀花) 二首

六曲闌干假碧樹。楊柳風輕、展盡黃金縷。誰把鈿箏移玉柱。穿簾燕子雙飛去。

滿眼遊絲兼落絮。紅杏開時、一霎

清明雨。濃睡覺來驚亂語。驚殘好夢無尋處。

莫道閒情拋棄久。每到春來、惆悵還依舊。日々花前常病酒。不辭鏡裏朱顏瘦。

河畔青蕪隄上柳。爲問新愁、何事

年々有。獨立小橋風滿袖。平林新月人歸後。

(注。此の二首共に或は歐陽修の作と爲す。前者は更に或は晏殊の作とも云はれて小山詞中にも收められてゐる。

汲古閣歐公六一詞には前者は之を刪り、後者は馮延巳の陽春集に見ゆる事を注してゐる。今此の二首四印齋本陽春集に據つて馮延巳の作として此に擧げる)。

花間集結集以後の五代の作者で傑出したものはこの馮延巳である。字正中、一名延嗣、廣陵の人。唐の昭宗天復年間を生れた。この時溫庭筠は疾くに死し、韋莊も蜀に在つて晩年の生活をしてゐる時である。馮延巳は詩詞に巧みに、書を善くし、南唐に仕へて同章平事、集賢殿大學士となる。其の人物は史書にはひどく排斥されて、或は文學を以て主を惑はすと云はれ、或は徒黨を結んで國政を亂したと云はれてゐる。南唐に徒黨のあつた事は事實で、馮延巳は宋齊丘等と一黨を爲し、孫晟、韓熙載、江文蔚らの一黨と對立した。そして宋齊丘馮延巳らの黨が先づ失敗し、孫晟等の黨が残つて、或は國事に死し、韓熙載らは残つて文筆を振つた事を考へると、早く衰へたものが損で、南唐の亡國を彼等の罪に歸せられたる處が多く、必ずしも一方のみが悪かつたとも斷じ得まいが、馮延巳は當時文學を以て君を惑す五鬼の一人に數へられたのである。彼の詞に就いては、王國維も「馮正中の詞は五代の風格を失はずと雖も、

而も堂廡特に大、北宋一代の風氣を開けり」と云つてゐるし、白雨齋詞話には詞の派別を論じて、一、溫飛卿（皇甫奇、南唐二主之に屬す）二、韋端已（牛松卿等之に屬す）三、馮正中（北宋の晏殊、歐陽修、晏幾道ら之に屬す）と云つてゐるやうに、彼の詞は北宋の詞家に與へた影響が大きく、詞の發展史の上に大事な地位を占めるものである。其の詞集は陽春集。此に擧げた二首、共に鶻踏枝、この調は又蝶戀花と云ふ。詞譜によれば宋の晏殊が蝶戀花と云ふ名に改めたのだといふ。雙調、前後段各五句、四仄韻。

六曲闌干偎碧樹韻 楊柳風輕句 展盡黃金縷韻 誰把鈿箏移玉柱韻 穿簾燕子雙飛去。滿眼遊絲兼落

絮韻 紅杏開時句 一霎清明雨韻 濃睡覺來鶯亂語韻 驚殘好夢無尋處韻

莫道閒情拋棄久。每レ到二春來一、惆悵還依レ舊。日々花前常病酒。不レ辭鏡裏朱顏瘦。 河畔青蕪隄上柳。爲問

新愁、何事年年有。獨立二小橋一風滿レ袖。平林新月人歸後。

この二首は共に春である。而も兩首の趣きが全く異なるのは、前者は色彩美しい叙景の詞であり、後者は抑揚に富み、叙情を主としてゐるからである。前者には六曲の欄干があり、碧樹があり、黄金の糸を展べつくした柳があり、微風があり、螺鈿を鏤めた箏、玉の柱ユトナがあり、簾があり、燕があり、更に遊絲、落絮、紅杏、細雨、鶯語があり、あらゆる春の景物を取り入れて而も填砌の跡を現はさぬのは、細かにみれば柳の糸は微風にそよぎ、燕は簾を穿つて並び飛び、かけらふはゆらめき柳絮は舞ひ、杏花に雨が過ぎ、鶯は亂れ啼いてゐる、皆靜止してゐないのだ。而もその夫々の動きが一つに融和されて、和やかな春の景色となつてゐるので、末の句に濃睡から覺めて、尙夢の跡を追ふ、春光に陶醉した心持ちを云つたのである。

之に比べて第二首は全く調子が變つてゐるが、この詞は孫光憲の生柰子の前半闋

春病與_三春愁_一。何事年々有。半爲_三枕前人_一、半爲_三花間酒_一。

と非常に似てゐるが道ふ勿れ、爲めに問ふ、何事ぞ、等、呼びかけの體を用ひて調子に抑揚が富んでゐて、而もそれは重い春愁をひとへに唱つてゐるのである。

李後主 浪淘沙

簾外雨濛々。春意闌珊。羅衾不暖五更寒。夢裏不知身是客、一晌貪歡。 獨自莫凭欄。無限江山。別時容易見時

難。流水落花春去也、天上人間。

藝術家で、ロマンチストで、己れにふさわしからぬ君主の地位に生れたばかりに、遂に國を亡ぼし身を滅した李後主の運命は、宋の徽宗の運命に似通つたものがあるが、李後主、名は煜、その父南唐の中主は矢張り文藝愛好家で、詩人文人を殊更に重く用ひ、前述の馮延巳等の爲めに政を誤られたと云はれる人である。中主の亡くなる前年趙匡胤（宋の太祖）は周を滅して皇帝を稱した。更に其の勢を以て南唐に迫つて來た。この時、李後主は父の喪に遭ひ、哀を宋に告げ、又宋に請ふて父の爲めに明道崇徳文宣皇帝と諡した。之からと云ふもの南唐は其亡國に到る迄、屢ば貢を宋に入れて修好を計つたのであるが、宋の天下併呑の欲望は遂に南唐が國を保つを許さなかつた。此の危機に在る時、後主は、宮中に在つて日々宴樂に耽り、豪華な生活は、或は夜毎燭を點さず、大寶珠を懸けて、其光を以て宮中を照らしたと云はれ、（詞苑叢談）宮娥魚貫して列り、鳳簫の響雲を遏めるといふ、溫柔郷に陶醉してゐたのである。

其の頃の作に一斛珠の詞がある。

晚妝初過。沈檀輕注^ニ些兒個^一。向^レ人微露^ニ丁香顆^一。一曲清歌、暫引^ニ櫻桃^一破。

羅袖裏殘殷色可。杯深旋被^ニ

香醪澆^一。繡床斜凭嬌無^レ那。爛^ニ嚼紅絨^一、笑向^ニ檀郎^一唾。

宵の粧ひを漸く了つて、沈檀の香を僅かに注ぎ、人に向つて微かにほゝえみ、澄んだ歌聲が、其の愛らしい唇から洩れる。袖の紅のうすものは、酒がこぼれて愈色鮮かに、繡床によりかゝる姿は嬌堪えがたく、刺繡の糸の端を口に嚼んで、戯れに人に向つて吐きかける。爛嚼紅絨、笑向檀郎唾は最も情緒纏綿たる處で、唾絨といふ言葉は閨中の女兒を寫す場合に多く用ひられる。或は浣溪沙の詞に

紅日已高三丈透。金鑪次第添^ニ香獸^一。紅錦地衣隨^レ步皺。

佳人舞點金釵溜。酒惡時拈^ニ花蕊^一嗅。別殿遙聞^ニ簫

鼓奏^一。

紅錦地衣は絨毯の如きものか。酒惡時は酒に中つた時。宮中の華麗な様と李後主の情痴の生活が遺憾なく現はれる。而も彼がかう云ふ生活をしてゐる間に、宋は愈々南唐に迫り、水陸兩軍並び進んで押し寄せた。南唐の徐鉉は宋に使して師を緩め、罪なき後主を許されん事を願ふたが許されず、臥榻之側、豈容^ニ他人鼾睡^一耶で、遂に江を渡つて金陵を圍んだ。後主一日城に登り、宋兵已に柵を列ね、旌旗野に遍き有様を見て始めて懼れ、悔いたが已に遅く、宋の開寶八年十一月、金陵の城は遂に陥つた。後主三十九歳の時である。城陥つて後主は軍門に降り、捕はれの身となつて北に向つた。冷雨に濡れて楊子江を渡る時、後主は城を望んで泣いて詩を賦した。

江南江北舊家鄉。三十年來夢一場。吳苑宮闈今冷落。廣陵臺殿已荒涼。雲籠^ニ遠岫^一愁千片。雨打^ニ歸舟^一淚萬行。兄弟四人三百

口不_レ堪_レ閑坐細思量。

同時に又破陣子の詞が傳つてゐる。

四十年來家國、三千里地山河。鳳闕龍樓連_三霄漢、玉樹瓊枝作_三烟蘿、幾曾識_三千才_二。 一旦歸爲_三臣虜_二、沈

腰潘鬢銷磨。最是倉皇辭_レ廟日、教坊猶奏別離歌、垂_レ淚對_三宮娥_一。

國破れ宗廟を辭するの日、猶家國に泣くと云はで、宮女に向つて涙する後主であつた。

北に幽閉さるゝ身となつて後、後主の生活は一變した。敵人の厳しい監視の下に、其處には最早や昔の歡樂は消え失せて、有るものは只故國を偲ぶ涙のみであつた。「此中日夕、只眼淚を以て面を洗ふ」とは彼が以前の宮人に送つた書中の言葉である。涙を以て洗つたのは其のやつれた面ばかりでなく、涙は彼の心をも洗つて行つた。亡國後の作品は以前と違つて、深く人の心に沁み込むもの計りである。相見歡の詞

無_レ言獨上_三西樓_二。月如_レ鉤。寂寞梧桐深院、鎖_三清秋_一。 剪不_レ斷。理還亂。是離愁。別是一般滋味、在_三心

頭_一。

剪れども斷たず、理めどもまた亂るゝは是れ離愁。境遇は彼の詞を限りなく深く哀しいものにした。國を失ひ、異境に零落して、彼は只詩を生命として限りなき憂愁をうたつた。上に掲げた浪淘沙の一闕は此のつもりで讀む可きである。

簾外雨潺潺_二 諷 春意闌珊_二 諷 羅衾不_レ暖五更寒_二 諷 夢裏不_レ知身是客_二 句 一晌貪_レ歡_二 諷 獨自莫_レ凭_レ欄_二 諷 無限江

山_二 諷 別時容易見時難_二 諷 流水落花春去也_二 句 天上人間_二 諷

雙調前後段各五句四平韻。同じく浪淘沙と云つても唐人の浪淘沙とは異なる。唐の浪淘沙は教坊の曲名から來たもので單調廿八字、七言斷句、皇甫松の浪淘沙を見ると

平平仄仄平平 仄仄平平仄仄 仄仄平平仄仄 平平仄仄平平

でつまり七言絶句なのである。然るに李後主の浪淘沙に至つて兩段とし、別に新聲を創めたて、浪淘沙の舊名を用ひたのである。此の詞の不暖は又不耐になつて居る本もある(詞譜、全唐詩)又獨自莫凭欄の莫は勿れとも讀めるし又暮れて欄に凭るとも解せられる。が、其の心持から云つても、強ひて暮れてと讀む必要はあるまい。春去れり、が歸去也となつてゐるのもある。(花庵詞選) 此には草堂詩餘に従つてをく。闌珊は本來は衰落の意であるから、春の漸く晚れんとするを云ふ。一晌は一食之頃、しばしが程の意。

北平の俞平伯氏は此の詞を次の様に説明してゐる。「前段は倒叙法である。しばし歡を食つて夢醒め、醒めて五更の寒を覚え、寒を覺ゆるに因つて寐を失し、寐を失して雨の音を聞くのである」と。順序立つた説明ではあるが然し夫れでは夢裏不知と云つた心持が死にはしまいか。もつと複雑な氣持が含まれてゐると思ふ。之は明方近くふと目覺めて、衾の寒さも心細く、最早眠れぬまゝに雨の音を聞き乍ら、今し方此の身の境遇をもしばし忘れて、いゝ氣持ちに寝てゐた自分の姿を、我といとほしむ憐れむ心持でなければならぬ。だから夢裏不知と云ひ歡を食ると云つただの。獨り欄に凭る勿れ、無限の江山、別るゝ時容易、見る時難し。は顔氏家訓の「別るゝは易く、會ふことは難し。古人重んずる所。江南餞送、泣を下して離を言ふ。北閩風俗此を屑とせず、岐路に離を言ひ、歡笑して首を分つ」の別易會難と同じ意。あゝして別れさせられて來た故國、最早再び相見る日は無いであらう。流水落花、春は永遠に去

つた、天上人間。この結句の天上人間が兎角問題になり、同時に此の詞の素晴らしい處であるが或は長恨歌の天上人間會らず相見んを引いて説かうとする。或は天上人間の隔りを云ふと説く。思ふに、天上人間何處にか去りして、春は去つた、そして我世の春も永遠に逝つて了つたといふ絶望的な心持であらう。西清詩話に、南唐の後主、宋に歸して後、毎に故國を懷ひ、嬪妾を念ふて鬱々慰まず、遂に此の詞を作り、幾くもなくして世を去つたとある。然し因樹書屋書影其他説部に傳ふる所の彼の最後は更に悲惨だ。それは彼の作つた次の詞によつて禍を招いたと云ふのである。

春花秋月何時了。往事知ニ多少ニ。小樓昨夜又東風。故國不レ堪ニ回首ニ月明中。

雕闌玉砌應ニ猶在ニ。

只是朱

顏改。問レ君能有ニ幾多愁ニ。恰似ニ一江春水向レ東流ニ。(虞美人)

亡國後の後主の詞は最早眼前の景を寫さうとはしない。胸に在り目に浮ぶのは只故國の山河である。王國維の所謂血を以て書いたもので、生を欲して得ず、死を求めて得ず、春が去り秋を迎へ、昨夜又小樓に東風の訪れ來るを知つた。この春花秋月は何時まで續くのであらう。然るにこの小樓昨夜又東風と云ふ句を宋の太宗は異心を抱くものと解して快からず、(或は強ひてこじつけたのであらうが) たま／＼七夕の宵、後主の邸に歌聲が起るを聞くや、遂に臣下に命じて後主に毒藥を進めしめた。それは牽機藥と云つて、之を呑めば忽ち身を弓なりに曲けて死ぬる激毒であつたと云ふ。後主が宋に歸して三年目、時に四十二歳、七夕は彼の生辰でもあつたのである。

晏殊 浣溪沙

一向年光有_レ限身。等閒離別易_ニ銷魂_一。酒筵歌席莫_レ辭_レ頻。滿目山河空念遠、落花風雨更傷_レ春。不_レ如憐_ニ取眼前人_一。

宋初の詞は多く五代の遺風を保つてゐた。晏殊は馮延巳の詞風を學んだものと云はれる。晏殊字同叔、臨川の人。太宗の淳化二年に生れ(馮延巳死後三十年)、李後主死後十三年)、仁宗の至和二年六十五歳を以て卒。此の人は一生極めて順調に行つた人で、仕へて翰林學士、樞密使となり、臨淄公に封ぜられ、卒して司空を贈られ元獻と諡された。彼の事蹟としては學校の復興で、五代の爭亂の後學校は殆ど廢されてゐたのを、彼は范仲淹其他の學者を延いて大いに學術を興した。富貴に在つても、自ら奉ずる寒士の如く、性豪俊、客を好み、當時の名士が多く其の門に集つた。非常に剛直な、そして淡泊な人であつたので、其子晏幾道は、先君平日小詞多しと雖も、未だ嘗つて婦人の語を作らず、と云つてゐる(漁隱叢話)。尤も必ずしもさうとも云へぬが、本來かうした性格の人だから艷詞があつても一體に品よく淡泊だつたのは事實である。たゞその順調な境遇、眞面目な生活から生じた詞であるが故に、大體その詩境は極めて平凡で嘉賓慶宴を唱つたものが多く、叙情はいつも對酒當歌、人生幾何の感慨ばかりである。一曲新詞酒一杯とか、人生樂事知多少、且酌_ニ金盃_一とか、暮去朝來即老、人生不_レ飲何爲とか享樂を謳歌したものが多く、決して絶望的な厭世感から來たものでなく、寧ろ順調な人の満ち足りた口調だと云へやう。彼の詞集を珠玉詞といふ。この浣溪沙の詞は、雙調、前段三句三平韻、後段三句兩平韻で、先に擧げた李後主の浣溪沙は仄韻を用ひてあるが、平韻の方が普通正體とされる。この詞は平淡な文字を以て素直に唱つてあるのがいゝ。前半闋第一句二句より第三句を生じ、後半闋又第一句二句より又第三句を生じてゐる。離別と云へば銷魂と云ひ或は黯然と云ふのは文選の江淹の別

賦、黯然銷魂者唯別而已。以來のきまり字である。憐取眼前人については唐人小説會真記に詩がある。已に約に背いて他に結婚した張生が、之も已に人に嫁した昔の戀人鶯々に再會を求めた時、鶯々は詩を送つて之を謝した。

棄置今何道。當時且自親。還將^ヌ舊來意。憐取^セ眼前人。

晏幾道 玉樓春

初心已恨花期晚。別後相思長在眼。蘭衾猶有舊時香、每到夢珠淚淚。多座不信心腸斷。幾夜々寒誰共喚。欲將恩愛結來生、只恐來生緣又短。

晏幾道字叔原號小山、晏殊の第七子。之は父の樸實謹嚴な爲人と全く異り、磊落不羈、酒中に耽溺して世の人の譏を憚らなかつた。然し乍らいつも純眞な氣持を失はず、人百たび已に負いて恨まず、人を信じては終にその已を欺くを疑はなかつた。かういふ風で社會的地位には遂に恵まれず、一生下位に沈淪した。詞は流麗で、情緒に満ち、詞中歌妓の名が往々見えるのはこの人の癖である。美しい句を拾へば限りが無い。

落花人獨立。微雨燕雙飛。(臨江仙)

夢入江南煙水路。行盡江南、不下與離人^一遇。睡裏銷魂無說處。覺來惆悵銷魂誤。(全)

相思本是無憑語。莫下向^一花箋^一費^一淚行^一。 (鷓鴣天)

紫驪認得舊游蹤。嘶過畫橋東畔路。(木蘭花)

等の佳句は小山詞中隨所に見出される。

乃でこの玉樓春の詞、小山詞には調を木蘭花と記してある。之は宋人が此の兩者を混同したのであつて、花間集には魏承斑の木蘭花一首と玉樓春二首を區別して並舉してゐるが尊前集に誤まれて以來之を混用したのであつて、宋人の木蘭花は實は多く玉樓春の體なのである。玉樓春は變調前後兩段各七字の四句、三仄韻。即ち

初心已恨花期晚韻 別後相思長在眼韻 蘭衾猶有舊時香句 每到夢回珠淚滿韻 多應不信人腸斷韻 幾夜夜

寒誰共喚韻 欲下將恩愛二結卅來生上句 只恐來生緣又短韻

この詞の生命は最後の二句にある。相識るの日晚きを恨みし相思の人は、今又忽ち去つて、面影のみ長く眼に在り。蘭衾猶當時の薰を存するに、夢醒めて涙するのみ。斷腸の思、恐らくは君知らじ、孤眠の夜寒く、せめて恩愛を來生に結ばんと欲するも、只恐る來生緣又短からむと。來生に望みをかけ得るものは幸福である。而も餘りにはかなかつた現世の縁は、よし來生に結ぼうとも、來生の縁も又この様に短いではあるまいか。此の二句、は之が只無病の呻吟で、又かりそめの空想で云ひ得る言葉であらうか。

范仲淹 蘇軾遮

碧雲天、黃葉地。秋色連波、波上含煙翠。山映斜陽天接水。芳草無情、更在斜陽外。黯鄉魂、追旅

思。夜々除非、好夢留人睡。明月樓高休獨倚。酒入愁腸、化作相思淚。

晏殊と同時代の作者范仲淹の詞である。范仲淹は晏殊によつて進み用ひられた關係から、晏殊に對して終生門生と稱した。字希文、文正公と諡された史上有名な人である彼が、同じく詞を作つた事は面白いが、實は宋代の天子が、

太宗仁宗、殊に後の徽宗の如き皆詞を愛した事が、士大夫の間に益々填詞を流行させたのである。晏殊、范仲淹、歐陽修、王安石、蘇東坡皆詞に巧みで、士大夫の雅會に盛に唱はれたものであつた。蘇軾は雙調、前後段各七句四仄韻。唐に蘇軾遮の七言絶句あり、宋詞は此の舊曲名によつて新聲を創めたものである。前段は叙景、非常に繪畫的で、碧雲天黃葉地は秋色を形容して實に美しい句だ。之は西廂記の有名な碧雲天黃花地のよつて來る處であらうが黃花（菊花）の地よりも黃葉の地の方が自然である。碧雲、黃葉、煙波、落日に映える山々で正に一幅の畫を見る心地である。支那の詩に斜陽を詠じたものが多いのは大陸の落日が矢張り我國で見ると美しいからではなからうか。今舉げた西廂記のやはり用じ齣にも淡煙暮靄相遮蔽。夕陽古道無人語、禾黍秋風聽馬嘶、又、四圍山色中、一鞭殘照裏、と云つて別離の場を畫の様に描き出して、全くこの詞を舞臺とした趣きである。前段のこの繪畫的な叙景に對して後段は優美な叙情となる。鄉魂、旅思。除非は日本讀みにすればたゞと讀めばいゝ。たゞ夜毎の夢の故里に通ふのみ。月明るき高樓に獨り倚る勿れ、酒愁腸に入つて、化して相思の涙となるの著想も尙優美さを失はぬのがいゝ。

歐陽修

柳外輕雷池上雨、雨聲滴碎荷聲。小樓西角斷虹明。欄干倚處、待得月華生。燕子飛來窺畫棟、玉鉤垂下簾旌。涼波不動翠紋平。水晶雙枕、傍有墮釵橫。

歐陽修は字永叔、仁宗の時諫官となり、參知政事に拜せられ、王安石と合はず、太子少師で罷めた人で、新唐書、新五代史を撰した有名な古文家、所謂唐宋八家の一人である事は誰も知つてゐる所であるが、處が彼も晏殊の門に出

た人で、又詞を善くし、その方面に於て晏殊を續ぐものであるが、其の詞風は間接には馮正中を學んだと云はれる。詞集は六一詞、琴趣外扁、近體樂府の三種、美しく柔かい情緒纏綿たるものが多く、文は載道の器の主張に基く彼の古文とは似ても似つかぬものである。

花似_レ伊。柳似_レ伊。花柳青春人別離。低_レ頭雙淚垂。 長江東、長江西。兩岸鶯鶯兩處飛。相逢知幾時。

等と云ふ調子の艶體の詞は澤山見えるが、有名なのは蝶戀花の

庭院深々深幾許。楊柳推烟、廉幙無_二重數_一。玉勒雕鞍遊冶處。樓高不_レ見章臺路。 雨橫風狂三月暮。門掩_二黃

昏_一、無_二計留_レ春住_一。淚眼問_レ花花不_レ語。亂紅亂飛過_二鞦韆_一去。

この詞は先の六曲欄干……と共に馮延巳の集中にも入つてゐるものであるが、李清照が之を歐陽修の詞として己れの庭院深々の詞に序を書いてゐる事に據つて、普通之は歐公の作と認められてゐる。女詞人李清照はこの庭院深々深幾許と云ふ疊字を用ひた句を非常に愛して、自分も此の句を起句に使つて詞を作つた。鞦韆は嘗つて支那の女の只一つの遊戯であつた。鞦韆のある處はいづれ深院であらう。淚眼問花花不語、亂紅飛過鞦韆去の句に就いて、毛先舒はかう批評してゐる。「此の句は層深法を用ひて極めて渾成されたものといへる。何となれば、花に因つて涙する、之が一層、涙に因つて花に問ふ、此が一層、花語らざるのみならず、又亂れ飛んで秋千を過ぎる。此が更に一層、人は愈々傷心、花は愈々人を惱ます。語愈々淺くして意は愈々入る。而も絶えて刻畫費力の跡の見えぬ處、即ち層深にして渾成である」と。少し厭味な説明ではあるが、當つてゐぬ事はない。楊柳烟の晩春の夕暮、人無き秋千の邊りに散る花を見て、ひそかに人を思ふ深閨の女兒の情を寫したと思はれる此の詞を、たとへば張惠言の詞選等には、之を解釋

して歐公が、韓琦、范仲淹が黨人として斥けられた事を慨して作つたものであると見て、庭院深々は其の遼遠なるを現し、樓高不見は哲王寤らざる也、章臺の路は小人の徑、兩横風狂は政令暴急なり、亂紅飛去は此度斥けられたもの一人に非らざるを云ふ、と折角の風流太守六一居士を飽く迄文以載道の古文家の殻に押し込めて了はうとしてゐるのはをかしい。さて初めに掲げた臨江仙一闋は變調前後段各五句三平韻。

柳外輕雷池上雨句

兩聲滴碎荷聲韻

小樓西角斷虹明韻

欄干倚處句

待得月華生韻

燕子飛來窺畫棟句

王鈞垂三下簾旌韻

涼波不與動簾紋平韻

水晶雙枕句

傍有墮釵橫韻

此の臨江仙を一に庭院深々と云ふ。それは何故かと云ふと、上述の如く李清照が歐公の庭院深々深幾許の句を用ひて詞を作つた。その作つた詞は蝶戀花の體を用ひず、臨江仙の調に寄せて作つたので、それが有名になると共に、今度は臨江仙の調を或は庭院深々と呼ぶ事がある様になつたのである。歐公の此の詞については詞苑叢談にその本事が載せてあるが此にそれは略す。俗な本事はむしろ此の詞の清新さを損ふからである。前段、遠く雷の音がすると思ふ間に、沛然と雨が來て、池の蓮の葉に降りそゞぎ、間もなく雨があがると小樓の西に虹が現れる。爽やかな雨後の庭。欄干に倚つて待つうちにやがて洗つた様な月が昇る。夏の夕立を描寫して、雨に打たれた蓮の葉の薰りさへ感ぜられるばかりである。後段は雨過ぎて後、靜かな夕暮れで、燕が飛び交ひ、玉鈞、簾、涼波、簾紋、水晶の枕、と皆涼しさを感じさせる。其の後に只一句、傍有墮釵橫、この一句で得も云へぬ艶つぽさを點じた。若し此處に例によつて牀に倚る美人でも形容し出したら、此詞の清鮮さは殆ど失はれて了ふであらうし、と云つて雨や夕月の爽かさのみでは宋詩にあり來りの境地になつて了ふであらう。夏の詞はかうあり度いものである。

蘇東坡 水調歌頭

明月幾時有、把酒問青天。不知天上宮闕、今夕是何年。我欲乘風歸去。又恐瓊樓玉宇、高處不勝寒。起舞弄清影、何似在人間。

轉朱閣、低綺戶、照無眠。不應有恨、何事長向別時圓。人有悲歡離合。月有陰晴圓缺。此事古難全。只願人長久、千里共嬋娟。

かういふ詞の流行時代、一世の才人蘇東坡が之に一指を染めぬ筈はない。餘技として作つたものとは云へ、當然彼一流の詞風を聞いた。評者は其詞風を豪放と云ふ。もとより婉麗の詞も作つたのであるが、全體から云つて豪放趣味のものである事は争へない。詞と云へば艷字艷句を用ひねばならぬやうに考へる人は此の一派の詞風の存する事を注意す可きである。詞集は東坡樂府。念奴嬌の赤壁懷古の大江東去、浪淘書千古風流人物云々の詞は、格調の高さ、雄健さを以て人口に膾炙されるものであるが此に掲げた水調歌頭も亦彼の詞の代表的なものである。水調歌頭など云ふ調名はもと唐の大曲の一遍を裁截したもので、樂府詩集に水調歌五遍といふのがあり、宋史樂志の四十大曲の中に新水調があり、又曾布に水調歌頭七遍がある。かういふ風に詞調は大曲から來たものが可成り多い。此の水調歌頭は雙調、前段九句四平韻(天、年、寒、間) 兩仄韻(去、字) 後段十句四平韻(眠、圓、全、娟) 兩仄韻(合、缺)で、平は天年眠圓全娟(先韻)に寒(寒)間(刪)を叶せしめ、前段の仄韻は去(御)と字(慶、詞林正韻には上聲九噴にして去聲九御と同じく第四部に入れて通用)、後段の仄韻二字は前段の仄韻と韻を換へて合に唇を叶用(詞林正韻には兩部に分つ)。初めの二句は李白の詩、青天有月來歲時、我今停盃一問之を用ひたもので、又恐瓊樓玉宇、高處不堪寒は明皇雜錄に唐の明皇が中秋の夜、月宮に遊び、寒さに堪えず丹二粒を服したとあるのを引いたと云ふもよし、又澄

み渡る月を見ては誰しも起る空想だとも云へる。起舞弄清影、何似在人間は杜詩に人間月影清の句がある事を草堂詩餘に指摘してゐる。願人長久、千里共婵娟は同じく草堂詩餘の擧げる文選月賦の隔千里兮共明月と同じ心持ちであらう。此の詞には序がついてゐて、「丙辰中秋歡飲して且に達す。大いに酔ひ、此篇を作つて兼ねて子由を懷ふ」とあるので、一體詞に序を附ける事は東坡樂府に創つたことらしいのであるが、之によつて其の弟を懷ふ詞である事がわかり、されば月に陰晴圓缺あり、人に悲歡離合あるを嘆じ月明千里故人を想ふ情がよく理解される。中秋の詞として代表的なものである。只此の詞を讀んでも、彼の詞が、實は詞ではなくて詩である、と云はれ、天下の工を極むと雖も要は本色に非すと云ふ非難（陳師道）がうなづかれぬ事はない。李清照も亦その音律に協はぬ事を譏つてゐる。たゞこの磊落清逸な詞風は一寸並ぶものがなかつた。此の東坡の詞風に幾分近いものに秦少游、黃山谷、後に辛稼軒等がある。

柳耆卿 雨霖鈴

寒蟬淒切。對長亭晚、驟雨初歇。都門悵飲無緒、方留戀處、蘭舟催發。執手相看淚眼、竟無語凝咽。念去去千里煙波、暮靄沈々楚天闊。多情自古傷離別。更那堪冷落晴秋節。今宵酒醒何處、楊柳岸曉風殘月。此去經年、應是良辰、好景虛設。便縱有千種風情、更與何人說。

北宋の詞人、上述の晏殊、范仲淹、歐陽修、蘇東坡等の人々が次第に所謂士大夫の詞を作り出した時に、之と對立して全く市井の民衆詩人として歡迎された詞人が柳永である。柳永、初の名は三變。字耆卿。仁宗朝の進士。屯田員外

郎だつたので柳屯田とも呼ばれる。然し仁宗は浮艶の文學をひどく排斥してゐたので、彼の様な詩人は朝廷から斥けられざるを得なかつた。彼がまだ進士に及第出来ぬ時に作つた詞に

黄金榜上。偶失龍頭望。明代暫遺賢。如何向。未遂三風雲、便爭不恣遊狂蕩。何須論得喪。才子詞人、自是白衣卿相。煙花巷陌、依約丹青屏障。幸有意中人、堪尋訪。且恁佯紅倚翠、風流事、平生暢。青春都一晌。忍抱浮名、換了淺斟低唱。(鶴中天)

と云ふ詞があるが、才子詞人、自らは白衣の卿相、と自負して、常に狹斜の巷に遊んで歌詞を作り、それが又非常な人氣を得てゐた。もと／＼こゝろいふ廢頽的な氣分に耽溺してゐた彼が、後に名を永と改めて進士に及第し、屯田員外郎とはなつたが、醉蓬萊の詞によつて仁宗の意を損ね、之より復た擢用される事なく、一生潦倒、花柳の巷に流連した。其の詞は當時非常な流行で、井水のある處、柳耆卿の詞を唱はぬものがないといふ有様だつた。彼の詞は所謂士大夫の詞とは違つて、俚語をかまはず詞に入れたのが特色で、之が大眾に喜ばれた一つであらう。安公子の詞等には似恁地、とか恁得とかいふ口語が盛にはいつてゐるのを見る。そして彼以前の詞は短い小令が多かつたのを、彼は音律に詳しかつたので、舊曲を變じて新聲を度し、長い慢詞を做起出した。その詞を卑俗と譏る人は多いが、それがむしろ彼の成功で、又格調の高いものも決して少くない。八聲日州の「關河冷落、殘照當樓」などは殆ど唐人の語と評される所である。其の詞集を樂章集といふ。この雨霖鈴の一首、柳耆卿の詞中最も有名なものである。雨霖鈴といふのは元々唐の玄宗が蜀の棧道で雨申鈴の音を聞いて作つた曲と云はれるが、柳のこの詞は雨霖鈴といふ舊曲名を借りて、新聲を創めたものである。雙調前段十句五仄韻後段九句五仄韻。

寒蟬凄切韻 對長亭晚句 驟雨初歇韻 都門悵飲無緒句 方留戀處句 蘭舟催發韻 執手相看淚眼句 竟無語
 凝咽韻 念去去韻 千里煙波句 暮靄沈々楚天闊韻 多情自韻 古傷離別韻 更那堪韻 冷落清秋節韻 今宵酒
 醒何處句 楊柳岸韻 曉風殘月韻 此去經年句 應是良辰句 好景虛設韻 便縱有韻 千種風情句 更與何
 人二說韻

離別の曲である。前段、寒蟬凄切、對長亭晚、は寫景に情を籠めて別れの愁をたゞえてゐる。以下縷々として別離の様を叙べて更に念去々で、遠い行手の心細さを思はせる。柔腸と云ふか、線の細い叙述が「十七八の少女が唱ふにいゝ」と評されたのは尤もで手を執つて相看る涙眼、竟に語なく凝咽すといふ處は一寸先に挙げた「江南餞送、泣を下して離を言ふ。……」といふ顔氏家訓の文句を想はせる。後段今宵酒醒何處、楊柳岸曉風殘月は此の句あるが故に此の一首が有名であり、否この句あるが故に柳耆卿が有名だと云つてもいゝ位のお馴染の句である。劉熙載が上二句點出離別冷落、今宵二句乃就上二句意染之。點染之間不レ得レ有レ他句相隔。隔則警句亦成二死灰一矣と云つてゐるのは面白い。が今宵酒醒何處、楊柳岸曉風殘月はいかにも美しい句ではあるが別に切な實感の伴つた句ではない。時代が下るに従つて所謂名句と稱されるものに時々かういふものがある。之に比べると次の周美成の別離の詞は非常に切實に人に迫る。

周美成 夜飛鵲

河橋送人處、良夜何其。斜月遠墮餘輝。銅盤燭淚已流盡、霏々涼露沾衣。相將散離會、探風前津鼓、樹杪參旗。花驄

會意、縱揚鞭亦自行遲。 迢遞路回清野、人語漸無聞、空帶愁歸。何意重經前地、遺錮不見、斜徑多迷。兔葵燕麥、向殘陽影與人齊。但徘徊班草、歎獻醞酒、極望天西。

前述の如く一方に文人士大夫の詞が行はれ、それが兎角音律に協はぬ憾みさへ生じ、一方には又新聲を出して巷間に持てはやされる柳耆卿等の詞があつたが、やがて此の兩者を調和し、所謂集大成したのが周那彦である。周那彦、字美成、清真居士と號す。徽宗朝の大晟府に關係した人である。大晟府とは徽宗崇寧の初め、從來樂制は訛謬殘闕し、樂經は散亡して、樂の據依する所が無くなつた事を患へて、蔡京、劉昺等の主張に基き、博く知音の士を天下に求め、魏漢津といふ者を擧げて其の説を用ひ、鼎を鑄、樂を定めさせた。之はやがて蔡京等が國を誤つた一つとして非難される處であり、又魏漢津の説に對しても當時已に反對者(陳暘等)がないではなかつたが、崇寧四年に鼎成り、天子は此に大晟の名を賜つた。之より大晟府が置かれ、大司樂典樂大樂令主簿協律郎以下の官を任命し、或は樂律を頒布し、或は音樂を教習し、又聲律を修正或は創造し、それは恰度漢の樂府に當るものであつた。(宋史樂志、宋史紀事本末)周美成は當時尤も長短句に長じ、自ら度曲し、音律に明かつた爲めにこの大晟府の僚屬に擧げられた。詞源によれば、彼は諸人と共に古音を論じ、古調を審定し、慢曲引近を増し、宮を移し羽を換へ、三犯四犯の曲を爲り、月律に按じて樂を定めたと云ふ。尤も其の期間は極めて短かく(王國維清真先生遺事表)僅か五六年間の事であらう。宣和三年周那彦は卒し、宣和七年には金人亂入して大晟府は廢せられ、禮樂は一時地に墮ちたが、やがて南宋に入り、再び樂を議する時になつて、大晟府に定められた樂律は多く復活され、詞人姜白石の如きも其の自ら曲を度するに多く語を之に取つた。此の様に周美成は非常に音律に明かだつた爲めに、從來稍もすると文人達の詞が律に協

はぬ譏りがあり、又柳永達の詞は音調は美しいが兎角卑俗に流れる傾向があつたのを調和して、詞句と音律と兼ね備つた詞を作つたのである。陳廷焯の白雨齋詞話に「詞は美成に至り乃ち大宗有り。前に蘇(東坡)、秦(少游)の終を收め、後に姜(白石)、史(達祖)の始を開く。詞人ありて以來、推して巨擘と爲さざるを得ず、後の詞を爲るもの亦其の範圍を出で難し。然も其の妙處は亦沈鬱頓挫に外ならず。頓挫あれば姿態あり。沈鬱なれば深厚を極む。既に姿態あり、又深厚を極む。詞中の三昧亦此れに盡く」と云つてゐるのは之である。其詞は汲古閣の片玉詞二卷、四印齋の清真集二卷集外詞一卷、疆村叢書の片玉詞十卷等がある。乃でこの夜飛鵲の詞を説明すると、雙調、前段十句五平韻、後段十句四平韻

河橋送^レ人處^句 良夜何其^{イカシ}^韻 (良一本) 斜月遠墮^ニ餘輝^韻 銅盤燭淚已流盡^句 霏々涼露沾^レ衣^韻 相將^ニ散離會^句

探^ニ風前津鼓^句 (草堂詩餘作相將散離。會處探風前津鼓。) 樹杪參旗^韻 華馳會^レ意^句 縱揚^レ鞭^韻 亦自行遲^韻 迢遞路回^ニ清野^句

人語漸無^レ聞^句 空帶^レ愁歸^韻 何意重經^ニ前地^句 (一本作重) 遺鈿不^レ見^句 斜徑多迷^韻 (多一本) 兔葵燕麥^句 向^ニ

殘陽^ニ (韻) 影與^レ人齊^韻 (影一本) 但徘徊班^レ草^韻 唏噓酌^レ酒^句 極^ニ望天西^韻

此の詩題して別情と云ふ。而も通篇離別の語を云はず、前段は別離の前夜の情景、後段は別後一人歸り來る路の光景である。河橋人を送る處、涼夜何其は蘇武の詩の起視夜何其と同じ、夜の明けるを恐れ、起つて夜空を伺ふこと。已に月も沈み、銅盤の燭流已に流れ盡すで、夜を撤して別れを惜しむ人の、今は涙も盡きて語る言葉もなく、たゞ相見

て坐する光景を暗示する。いつか露は衣を濡し、渡津の太鼓も夜明けを知らせれば(王安石の詩に月落聞津鼓とあるが、聞くと云はず探るといへば尙躊躇する心持ちが含まれる)梢には曉の星が燦然と瞬く。さらばと出で立つに馬も人の心を悟つてか、鞭を揚けても進みかねる。夜を徹して曉に至る、別れの前の情景である。後段は已に人を遠く見送つて、遠い野の路を一人歸り來る光景。人聲も今は聞えず、愁に沈んで歸る道は、けさは二人で行つた道ではないか。遺鈿不見は同じ周美成の詞に釵鈿墮處遺三香澤、といふ句もある、何か路端に、その人の落したものでありさうな氣がするのに。心迷へばたどる小徑も覺束なく、陽は既に平野の果てに傾いて兔葵燕麥の影は人の丈程に地にしいてゐる。徘徊遂に堪えかねて草に坐し、唏噓して酒を地に澆ぎ、遠く西の空を望んで、去つた人の身の上を祈る。といふので一體周美成の詞は結句に非常に力がこもるのが常である。悲しみの心を云はず、押へ押へて遂にこの結句となる。この詞は可成り戲曲的に構成されてゐるが特に別れの場を畫かず、其の前後の情景のみ畫いて、一層切實な悲哀を感じさせる處に數多い別離の詞中類の乏しい所以である。

李清照 醉花陰

薄霧濃雲愁永晝。瑞腦噴金獸。佳節又重陽。寶枕紗幮、半夜涼初透。東籬把酒黃昏後。有暗香盈袖。莫道不消

魂、簾捲西風、人比黃花瘦。

男中の秀後主、女中の秀易安と稱せられる女詞人、名は清照、易安居士と號す。濟南の人である。宋の神宗元豐七年に生れ、後趙明誠に嫁いだ。郷里に屏居十年、首に明珠翡翠の飾なく、室に塗金刺繡の具なく、たゞ書史百家の校

勘に夫と共に刻苦從事した。然るに靖康三年、易安四十三歳の時、夫が淄川に赴任してゐる時、金人亂入して都を犯した。此の時已に、箱に盈ち篋に溢るゝ書籍畫幅も、いづれ已れのもの物で無い事を覺悟したが、ついで翌年、夫が母の喪に金陵に奔るや、書畫古器の重く大きなもの、或は比較的重要でないものを去つて尙十五臺の車に載せて淮を渡り江を渡つて南に運んだ。時に青州の故宅には尙書冊什物が屋十餘間に殘されてゐたと云ふが、間もなく金人が青州を陥れると共にそれらは盡く灰燼に歸した。此のあたりの事は有名な李易安の金石錄後序に詳しい。之は夫の著金石錄に彼女が序を書いたもので古來名文といはれるものである。四十六歳夫を喪ひ、同時に金人益々浸入して洪州を陥れ、先に辛うじて南に移した書畫も盡く散佚して了つたのである。其後或は衢にゆき越にゆき、又杭に赴き、其間に再嫁したと云ふ説とせぬと云ふ説が色々問題になるのであるが兎に角艱難な生活を續けたらしい。彼女の詞は今傳はるものは少ない。直齋書錄解題には漱玉詞一卷又云別本作五卷、花庵詞選には漱玉詞三卷とあるが皆傳らぬ。四庫に著録されたものは毛氏汲古閣本で詞はたゞ十七首。後王鵬運が樂府雅詞に錄さる二十三首と宋人の選本説部より二十七首を得て之を一集とした。之が四印齋本漱玉詞である。文は前述の金石錄序の他に詞論一篇あり、前人の詞についての批評に一見識を示してゐる。四庫提要に清照一婦人を以て而も詞格は周柳に抗軼す、詞家の一大宗と云つてゐるやうに女流詞人としては之に並ぶものはない。如夢令の

昨夜雨疎風驟。濃睡不消殘酒。試問捲簾人、却道海棠依舊。知否。知否。應是綠肥紅瘦。

の綠肥紅瘦は佳句として最も人に知られる。可愛い詞は點絳脣の

蹴罷三秋干、起來慵整纖々手。露濃花瘦。薄汗輕衣透。見有三人來、鞞剗金釵溜。和羞走。倚門回首。却

把青梅二喫。

鞦韆に戯るゝ少女が、人の來るのに忙いで逃けて、門まで來ると、振り返つて、青梅を喫ぐ振りをして此方を窺ふ、少女の嬌羞の態が生きくと描寫されて、女流作家のものらしい。又後の詞家は好んで聲々慢の尋々覓々冷々清々慊々慘々戚々、乍暖還寒、時候最難將息の疊字の技巧を學び度がる。が上に掲げた醉花陰は特に代表的なもので雙調前後段各五句の三仄韻

薄霧濃雲愁ニ永晝韻 瑞腦噴ニ金獸韻 佳節又重陽句 寶枕紗幮句 半夜涼初透韻 (涼一本) 東籬把レ酒黃昏後韻

有ニ暗香盈ニ袖韻 莫レ道不ニ消魂句 簾捲ニ西風句 人似ニ黃花ニ瘦韻 (似一本)

この調換頭の句第四句(酒)は韻字を用ひ、所謂短韻を句内に藏するものである。この詞題して九日といふ。重陽の頃陰晴定まらぬは滿城風雨近重陽とも云ふ通り。薄霧濃雲、鬱陶しいすぐらい晝の氣分を次の瑞腦金獸に噴く、で香爐からゆるく立ちのぼる香煙で一層感じさせる。佳節又重陽の又は永晝を愁ふと相俟つて、重陽の佳節もよそに物うい憂鬱なこの頃の思を示す。夜に入つて初めて透る寒さ。上に紗幮といつたのでこゝに透るといふ。後半開第一句は重陽に關して菊花の酒、菊花の酒といへば陶淵明、乃で東籬酒を把る黃昏の後と云ひ、黃花といふ字は最後に出して、こゝでは黃昏の後をうけてただ暗香袖に盈つるありと云つた。莫レ道不ニ消魂一に應じて人は黃花に似て瘦せたりと云ふ。簾西風に捲く、人は黃花に似て瘦せたりは非常に有名な句で、西廂記等にも(第五本第一折)用ひてゐるが、俞平伯(雜拌凡三)ではないが實は解釋しやうとして出來ない曖昧な句だが、佳句には違ひない。綠肥紅瘦も、人似黃花瘦もどちらも「瘦」の巧みな用ひ方である。李易安がこの詞を作つた時、夫の許に之を書いて送つた。夫明誠は歎

賞して、且つ自ら速ばぬ事を愧ぢ、之に勝るものを作り度いと、客を謝し、寢食を忘れて三日三夜、五十闋の詞を作り出し、之に易安の此の詞を雜へて友人に示した所が友人は之を玩味する事再三、只三句を激賞した。その三句とは實は易安の作つた莫道不銷魂、簾捲西風、人似黃花瘦であつたと云ふ事である。

辛棄疾 賀新郎

綠樹聽鶯鳩。更那堪、鷓鴣聲住、杜鵑聲切。啼到春歸無尋處、苦恨芳菲都歇。算未抵、人間離別。馬上琵琶關塞黑、更長門、翠輦辭金闕。看燕燕、送歸妾。將軍百戰身名裂。向河梁、回頭萬里、故人長絕。

易水蕭々西風冷、滿座衣冠似雪。正壯士、悲歌未徹。啼鳥還知如許恨、料不啼、清淚長啼血。誰共我、醉明月。

南宋初期の作家は蘇東坡の影響を受けたものが多く、所謂「橫放傑出」の詞風が流行した。と云ふのは徽宗欽宗の北狩、宗の南渡以來、黍離麥秀の感は當時の慷慨の士達の心を刺戟して、或は失地の恢復を志し、或は朝廷の惰弱を嘆じて、英雄不平の氣は往々詞にも現はれて悲壯なものが出來たのであらう。此の派の代表者が辛稼軒である。辛棄疾字幼安、號稼軒、濟南歷城の人。寧宗の朝、湖南、江西、浙東の諸地方に安撫使となり、龍圖閣待制、樞密都承旨に進み、開禧三年卒。固より慷慨の士で、この人平生抑鬱無聊の氣は發して激烈豪壯な詞となつた。蓮子居詞話には「辛稼軒別に天地を開き、古今に横絶し、論孟詩小序左氏春秋南華離騷史漢世說選舉李杜の詩を拉雜運用し、彌よその筆力の峭なるを見はす」と評したが、兒女の情態を去り、脂粉の香を洗つて、詞に於て別に一宗を立てたもので

ある。此の賀新郎の一闋は其の詞風を示す代表的なものと思ふ。雙調、前後段各十句、七仄韻（堪、門、梁、士、啼の下の・は讀を示す）序に、茂嘉十二弟に別るとある。茂嘉十二弟は梁啓勳の疏證によれば彼の從弟である。前半闋綠樹より芳菲都歇までは春去らんとして、逝く春を歎く杜鵑の聲切なるを云ふ。それより算未_レ抵_レ人間離別_一を以て、轉じて人間離別の悲哀を云ひ起す。先づ馬上琵琶關塞黒は胡地へ赴く王昭君の別れ、長門云々は司馬相如長門の賦の漢の陳皇后の嘆きか。燕々は詩經の衛の莊姜が婦妾を送る悲しみである。後半闋は更に一轉して之は悲壯な男性の決別を擧げる。河梁云々は蘇武李陵の別れ、易水壯士は荊何が秦に入る門出、白衣を着て之を見送る悲壯な場面。かうして自ら弟と別るゝに就いて、敢て婦女子の言を出さず、再び杜鵑を借り來つて長く血に啼くと云つた。結局も誰か我と共に明月に酔はんと、情を抑へて大きく餘韻を持たせたのである。この詞が數多の故事典故を並べて、而も破綻を來さぬのは一轉再轉して疊みかけてゆく調子の高さ全體を貫く氣魄である。之は彼の詞風をよく代表するものである。尤も辛稼軒とても柔らかない情詞を作らなかつた譯ではない。祝英臺近などその方でいゝ作である。

寶釵分、桃葉渡、煙柳暗_三南浦_一。怕_レ上_三高樓_一、十日九風雨。斷腸片々飛紅、都無_レ人管_一、更誰勸_レ啼鶯_一聲住。
 鬢邊覷。應_三把_レ花卜_三歸期_一、才簪又重_レ數。羅帳燈昏、嗔咽夢中語。是他春帶_レ愁來、春歸何處、欲_レ不_レ解_下帶_一將_二愁_一去_上。

桃葉渡は晋の王猷之の故事と其名の故に美しく空想される。今は秦淮の近く、たゞ濁つた水が淀んだ堀割であるが。後段鬢邊覷より又重數までの織細な句と、末の三句の巧みな着想は稼軒詞中の優れたものである。

姜白石 齊天樂

庾郎先自吟「愁賦」。凄々更聞「私語」。露濕銅鋪、苔侵石井、都是曾聽伊處。哀音似訴。正思婦無眠、起尋「機杼」。曲々屏山、夜涼獨自甚情緒。西窗又吹「暗雨」。爲誰頻斷續、相和砧杵。候館吟秋、離宮弔

月、別有「傷心無數」。幽詩漫與。笑籬落呼「鐙」、世間兒女。寫入琴絲、一聲々更苦。

上述の如く南宋に入つて所謂豪放の一派が盛に行はれたが然し之は四庫提要にも云つてゐる様に「倚聲家に於ては變調」であつて、それが所謂叫囂に流れ音律に拘らぬといふ傾向を帯びるやうになると詞の正道とは云はれない。そこへ、南宋も次第に臨安の小朝廷に安んじて、明媚な風光の中に苟安を求め、士人も皆聲樂を楽しみ風雅な生活を求めるといふ様になると、詞も亦音律に協はぬ徒らに豪放なものを去つて、靜かな文人趣味のものが起つて來たのである。乃で清空、古雅といふ様な事が詞に求められる事になつて來た。此の時姜白石が現はれて、一方には音律に明るく、大晟の遺響を尋ねて自ら曲を度し、又典雅な文字を選んで詞を作つたのであつた。藝概に白石の詞は幽韻冷香、樂に在つては琴、花に例へれば梅と評したのは彼の詞風をよく現はしてゐると共に、南宋文人の趣味をも同時に示してゐるのである。姜夔字堯章、白石道人と號した。隱居して仕へず、山林に自適した。詞も此に至つて全く文人の弄びとなつて來たのである。従つてその率直さは失はれて、殊に白石につぐ此派の詞人吳文英(夢窗)の詞の如きは、難澁な典故代字を好んで用ひ、王國維の所謂「霧裏花を見るが如く、終に一層を隔つ」る様になつて了つた。

白石の代表作として人の推すのは暗香、疎影の二闋であるが、それよりも此に挙げた蟋蟀の詞の方が私は好きだ。詠物の詞として美しいものである。齊天樂は變調前段十句六仄韻、後段十一句六仄韻、起句の庾郎の句は一篇の前置

きとして、以下凄々の句は蟲聲、露濕云々は叙景、却是の句は追憶、哀音似訴は蟲聲、正思婦云々は聯想、曲々屏山以下は叙情。後段西窓云々は叙景、爲誰云々は蟲聲、候館の句は聯想、と叙景、叙情、聯想、追憶を代るくとりまぜて、其間に蟲聲を形容して行く。この齊天樂の調には前段第三句四句、後段第四句五句に必ず對句を用ふる様である。露濕銅鋪、苔浸石井も、候館吟秋、離宮弔月は何れも美しい對句である。全體に美しく快い調子である。しかし蟋蟀など秋の夜について色んな詩想を連ねたので、とりとめた切實感はない。そこに籬落呼燈の句があれば、俄に感じが生き／＼と躍動して來る筈であるが、上に笑ふの字あり、下に世間の兒女をいつて已れから離れたものにして、了ひそれは素直な寫實でなくなつて、切角の精彩を消して了つてゐる。だから寫入琴絲の句も、初めの吟愁賦に呼應してゐるのであるが、何かよそ／＼しいものを感じて了ふ。こういう傾向は一體に南宋以後の詞の特色で北宋以前の率直な、眞實な作詞の態度は見られなくなつて了つたのである。